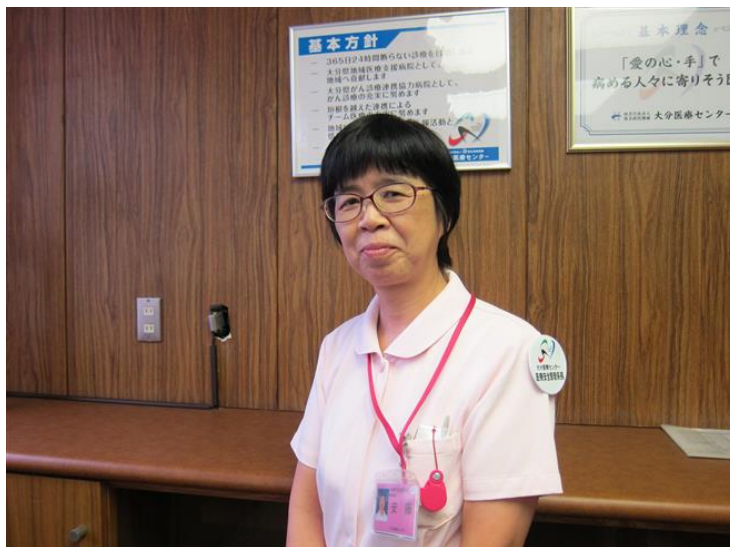


## 【大分】「ヒヤリハット小劇場」で医療事故に当事者意識を持つ-安藤万寿美・大分医療センター医療安全管理係長に聞く◆Vol.1

2019年10月14日(月)配信 m3.com地域版

安全な医療を提供することを目的に医療安全管理体制の整備要件の一つとして、病院職員を対象に厚生労働省より義務付けられている年2回の医療安全研修。この一環として、大分医療センターでは2013年7月から、医療事故や未遂事例を演劇に仕立てて院内で上演する「ヒヤリハット小劇場」を取り入れた。導入の背景や運営方法について医療安全管理係長・安藤万寿美氏に話を聞く。（2019年8月19日インタビュー、計2回掲載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）



医療安全管理係長・安藤万寿美氏

——「ヒヤリハット小劇場」が始まった経緯について教えてください。

きっかけは院内で実施される医療安全研修への参加率が悪かったことです。研修は、勤務時間外に開催されることもあり参加は任意なのです。当時当院では毎回一つテーマを決め、パワーポイントを使いながら講義形式で研修を進めていたものの、「担当外の診療科の話は関係ない」となかなか足を運んでもらえなかったり、自分に該当するものでも「既知っている」という思い込みから参加してもらえなかったりと、200人を超える医師や看護師が在籍するにも関わらず、参加者は平均で約80人（2012年時点）でした。そこで当時副院長であった穴井秀明先生（現院長）が中心となって2013年7月、医療安全研修に「ヒヤリハット小劇場」を導入すると決めたのです。

——なにか参考にしたモデル事例があったのでしょうか。

栃木県・佐野厚生総合病院が取り組まれていた「ヒヤリ・ハット小劇場」を参考にしました。佐野厚生総合病院では2002年からいち早く医療安全研修の一環として始めていて、2012年には『ヒヤリ・ハット小劇場実録26事例 佐野厚生総合病院編—らくらく楽しい医療安全教育研修にそのまま使える』というDVD付きの本を出版されていたんです。穴井先生はそのニュース記事を見て、「講義中心の医療安全研修では医療事故の臨場感や細かいやり取りを伝えるには限界がある。これなら面白く医療事故に対する関心や意識を向上できそうだ」と大分医療センター用に少しアレンジを加えて「ヒヤリハット小劇場」を始めることに決めました。導入から今年で7年目を迎えます。

——大分医療センターでは「ヒヤリハット小劇場」を誰がどのように運営されていますか。

当院では、医療安全推進部会が中心となり運営しています。この部会は医師や看護師、薬剤師、検査技師、栄養士、リハビリスタッフなど各部署から毎年1人ずつ選抜して形成された24人のチームです。半年に一度の1講演でいたい2つの医療事故事例を紹介するのですが、テーマ決めやシナリオ書き、ナレーター・役者の振り分けは私が担当しています。

取り上げるテーマは主に当院で実際に起きた医療事故事例の中から、今後も繰り返し起こりうるものや重大な事故に発展する恐れのある事例です。そのほかニュース性のある医療事故事例や医療器具・薬の取り扱いの変更における注意・啓発も劇の題材にしています。講演の1週間前にはあらかじめ音響係、カメラマン、受付係、ナレーター、役者に台本を渡して、本番の2時間前にリハーサルをして適度にアドリブを織り交ぜながら進めています。

——劇(医療安全研修)の全体の構成はどういった流れなのでしょう。

1事例の劇は約10分間の上演です。院内の大会議室を劇場に、ミスが起きた医療事故現場の再現を実演した後、観劇に来た参加者に向けて感想や意見を求めます。この事例に対してどこで医療事故を防げたと考えるか、どう対応するのが的確だったのか。ただ観劇を楽しんでもらうだけではなく、ディスカッション形式にすることで医療事故にリアルな当事者意識を持ってもらうことが目的です。これは当院オリジナルの手法で、各部署の職員から毎回想定以上の名案が発表され運営側も新たな気づきを多くもらっています。ディスカッションの後は医療事故の防止策を盛り込んだ場面を実演し、各事例の専門家からのレクチャーを15分ほど添えて1事例を25分程度で講演を終了します。

大切にしているのは、講義だけでは実践に結びつきにくい課題を「小劇場」で演じるだけでなく、医師役は医師、薬剤師役は薬剤師と普段と同じ職種を演じ本名で呼び合うことです。こうすることで日常の診療と違和感なくリアリティを持ってもらい、実践に繋げていけることを目標にしています。

——これまで取り上げた事例について教えてください。

2013年7月の初回では手術患者誤認の医療事故事例を取り上げました。次に薬剤に関することをテーマに取り上げ、そのあとは3回に渡って緊急時の情報伝達に有効と言われるSBAR（エスバー：Situation状況 Background背景 Assessment考察 Recommendation提案）やSBARの頭にI（Introduction自己紹介）をつけたISBAR(アイエスバー)など実践に活かせる事例を採用しました。その後は入院ベッドからの転倒事例や輸血や酸素ボンベの取り扱い間違い事例、造影剤のアレルギー発生時の連携不足事例などもテーマに取り上げています。



大分医療センター 外観

◆安藤万寿美（あんどう・ますみ）氏

1983年国立療養所宇野病院付属看護学校卒業、1986年国立大分病院看護師採用、1993年 国立大分病院副看護師長昇任、2006年別府医療センター看護師長昇任、2012年 大分医療センター配置換え、2014年大分医療センター医療安全管理係長。

【取材・文＝新本菜月(株式会社チカラ)】